

七七 日本の空に翼をよみがえらせ

民間航空を世界的に成長させた

松尾静磨

(一九〇三〜一九七三)

武雄市朝日町高橋から伊万里市方面へ急な坂を登ると、そこが戸坂峠です。ここから若木盆地が開けてきます。盆地の中央部に日本有数の、大きな楠の木が空高くそびえています。この大木をなつかしそうに見上げている紳士がいました。この人こそ、日本の民間航空を世界的にまで成長させた松尾静磨でした。

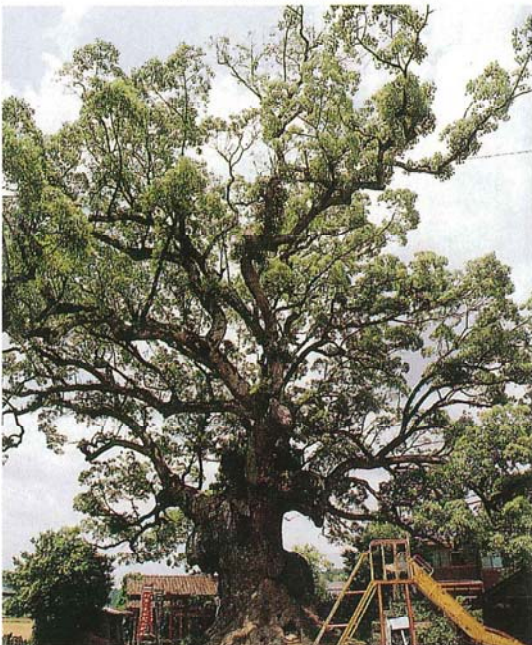
幼いころ静磨は、野山をはだしてかけまわったり、木に登ったりよくしました。そして峠を見る時向こうには、何があるだろうかと思いました。

少年の思いは、早くも外の世界に向かって動き始めておりました。

若木という森から、もつと大きな世界にはばたいてみたいと考えるのに、そんなに時間はかかりませんでした。

旧制佐賀中学校に入学した静磨は、団体生活に欠くことのできない秩序と規律をきびしくしつけられました。冬の寒い日、剣道の練習がありました。道場は土間でしたので、はだして立つと、頭のとっぺんまでしびれる

川古の大楠(武雄市若木町川古)



こともありません。

こうした厳しい訓練にもたえ、強い精神力と、自分のことは自分でするという独立心を身につけました。

勉学の志をもって戸坂峠を越えた静磨にとって、苦しい勉強も、苦痛にはなりませんでした。

昭和三年（一九二八）、九州大学を卒業し、東京で航空エンジン設計技師としての仕事を始めました。この仕事は、空のつきあいのきつかけになりました。しかし、その時、世の中は大きな不況にみまわれ始めていました。

昭和五年（一九三〇）、航空局に移り、日本の飛行場などを監督する仕事につきました。が、しだいに戦争の世の中になっていき、旅客機で乗客を輸送することはできなくなりました。

昭和二十年（一九四五）戦争が終わり、占領された日本は、いっさいの飛行機を飛ばすことは許されませんでした。でも、再び日本の翼がよみがえることを信じて、飛行場の維持や無線の整備につとめました。

航空庁の長官となっていた静磨は、昭和二十五年（一九五〇）にアメリカ合衆国へ航空事情視察に出かけました。そこで、すばらしい飛行機の発達をみました。地上からの電波にあわせておくと、飛行機はその電波にあわせて飛ぶしくみになっています。これを見た静磨は、思わず目をみはりました。日本の旅客輸送が世界的な水準に回復するまでには、ものすごい努力があることを悟らねばなりませんでした。

昭和二十六年（一九五一）、やっと日本の飛行機を飛ばすことができるようになりました。日本人による航



松尾静磨の生家（武雄市若木町川古）



世界に飛び立つ日本の翼

空輸送が、人々の心に希望を与えました。

この年、民間航空会社の経営にたずさわるようになった静磨は、外国の航空会社と競争するには、安全のための整備と乗客へのサービスが必要だと考えました。お客さんにとっては、サービスの善し悪しも航空会社を選ぶ条件になります。

日本とアメリカを結ぶ太平洋路線を開設したものの、外国の航空会社との競争が激しく、初めのころは、乗客が大変少ない時期がありました。経営は大赤字の状態、国の補助で、この苦境を乗り越えなければなりません。つらい毎日が続きました。しかし、将来の日本を考えると、太平洋路線は、わが国の貿易拡大のためには必要でした。なんとかして維持し発展させていかなければなりません。

日本の飛行機が、やっと世界の仲間入りしていたころ、世界の飛行機は、プロペラ機からジェット機に変わりつつありました。このような世界の変化に対応していくために。機体の整備がいつそう重要となってきました。

静磨は、経営と同じように徹底して安全整備とサービスに力をいれました。静磨たちの努力によって、すこしずつ外国の航空会社と競争できるようになりました。乗客は少しずつふえ



松尾静磨の胸像（武雄市立若木小学校）

ていき、日本の国旗をつけた飛行機が世界の空を飛ぶようになり
ました。

静磨は、スポーツマンでもありました。十一歳のころからテニスに親しみ、日本庭球協会会長にもなりました。静磨は、テニスを通してテニスが天候とたいへんかかわっていることや、体に気を配ることの大切さを知りました。そのことは人の命をあずかる旅客機輸送にも通じることでした。特に天候の変化と安全性には注意するように心がけました。

安全とサービスに気を配る人生が、日本の民間航空を世界的にまで成長させたのかも知れません。

わたしたちが、気軽に飛行機で旅することができるのも、先人が、努力と忍耐と誠意で取り組み、日本の空をよみがえらせ、世界へ航空路線を開いてきたからです。

松尾静磨は、航空事業の発展に貢献し、国際民間航空界の最高栄誉エドワード・ウォーナー賞を受けています。このことを大変喜んでくれたのは、若木の家で「ぼたもち」を食べながら、日本の将来を語り合った市村清でした。地元の人々も、静磨の業績を大変喜び、胸像を建てました。静磨もまた、ふるさとの若木の森を一生忘れることはありませんでした。